

「アパートメント…コメディ or ミステリー？」

「アパートメント…コメディ
OR
ミステリー？」

【登場人物】

大家

立川

内山

山田

遠藤

早乙女

渡辺

坂本

大家の弟

斉藤

【一場】

舞台は古びたボロアパート『はちぼち荘』。後方に部屋への扉が3つ（下手から1の部屋2の部屋3の部屋とする）。下手が玄関、上手手前からは大家の部屋へ、上手後ろは2階への階段がある。舞台はちょうどアパートの共同スペース（リビング）。大きめのテーブルが1つと椅子が6つある。

明転。夕方なので薄暗い。スーツ姿の立川と着物姿の大家が椅子に座って談笑している。

大家「そうだったんだ」

立川「はい。それで急にこの辺りの調査を任されることになりました」

大家「大変だね」

立川「はい。ですのでこの辺のことはほとんど何も分からないですよ」

大家「僕でよかったら何でも教えるよ」

立川「ありがとうございます大家さん」

大家「それじゃあ立川さん、びっくりした訳だ？」

立川「はい？」

大家「ほら、このアパートはちぼち荘、汚いでしょう？古いし」

立川「いやいや、そんなこと…ないと思いますけどね」

大家「だからさ。まさかこんな建物に人が住んでるなんて思わなかったんじゃないの？」

立川「いやいやそこまでは思っていないですよ大家さん」

大家「そこまで？」

立川「ああいえいえ、その何というか…趣がね、すごいですよね、ここ」

立川、辺りを見回し落ちている掛け時計をじっと見つめる。

立川「…因みに今だいぶ薄暗いですけど電気とかは…？」

大家「今ちよつと調子悪くてね」

立川「そうですか…」

大家「古くてボロいでしょ？ここ」

立川「いやそんなこと…」

大家「ホントは？」

立川「…ちよつとだけ思います」

大家、泣き出す。

立川「えー…ごめんなさい！」

大家、泣き止む。

大家「すっきりした」

立川「びっくりさせないでくださいよ」

大家「やっぱり人に言われると少し堪えるね」

立川「なんか誘導尋問に引っかけかかってしまい、すみませんでした。あの、落ちた時計は？」

大家「ああ、もうそのままにしておいて」

立川「…はい」

大家「でもね立川さん。このアパート、こう見えてもけっこう人住んでいるんだよ。5人も」

立川「え…そんなにですか？」

大家「驚くねー？」

立川「あ、すみません…。そういう意味じゃないんですけど…」

間

立川「あ、このその皆さんは…今は出かけられているんですか？」

大家「ううん、ほとんど部屋にいますと思うけどな」

立川「そうですか」

立川、アパートの部屋を見渡す。

大家「と言うかね…普段はね、もつとうるさいんだよ」

立川「え？」

大家「この共同スペースとかでね、皆さんでよくワイワイやったりするんだよ」

立川「へー。そういうの最近じゃ珍しいですね」

大家「そうかな？」

立川「はい。皆さん、仲がよろしいんですね」

大家「ちよつと良すぎて困っちゃうくらいですけどね。昼間ならまだ良いんだけどさ、夜中も騒ぐんだよ。寧ろ夜中の方がうるさいくらいで。(段々と声を大きくしていく)ご近所からも遠回しにクレームがくるし、もうちよつと節度ってものをもってほしいなあ。そもそも節度って言葉を知ってるのかなあ彼らは！知っていても実践できていなければ意味もなし！」

立川 「大家さんがご近所迷惑になっちゃってますよ！」
大家 「おっと」と

立川 「どうか住人の方に聞こえちゃいますよ」

大家 「うん。聞こえるように言ったからね。ははは」

立川 「ははは…。なんか大変ですね、大家さんというのも」

大家 「まあ…とは言ってもね、ここだけの話だけど…ホントはそういうのもね、ちよっつとは嬉しいんですよ、賑やかで」

立川 「なんだ。そうなんですネ」

大家 「まあ彼らには絶対言わないけどね、調子に乗るから」

立川 「ははは…なるほど。でも話を聞く限りですと皆さん、愉快そうな方達なんですネ」

大家 「それだけが取り柄って感じだけだね。あ、そうだ。せっかくだしちよっつと呼んでみようか？」

立川 「え？」

大家 「おーい！…おーい！」

大家、3つの部屋と2階に向かって呼びかける。

立川 「いやいやそんな、大丈夫ですよ」

大家 「まあ遠慮しないで。おーいみんなー！」

立川 「皆さんもお忙しいと思いますし」

大家 「ちよっつとくらいなら問題ないない」

立川 「いえいえ、本当に今日は大丈夫ですから」

大家 「そう？」

立川 「はい。私もそろそろ…（腕時計を見る）お暇させてもらおうと思いますので」
大家 「分かったよ」

立川、立ち上がる。

立川 「それでは、本日はありがとうございます」

大家 「いえいえ」

立川 「あ、私の名刺、置いておきますね」

立川、名刺をテーブルの上に置く。

大家 「うん」

立川 「それではまたお伺いしますので。失礼します」

大家「はいー」

立川、下手からはける。

完全明転。

立川がはけると同時に、1の部屋からワイシャツを着た山田、3の部屋から上下ジャージでメガネを掛けた早乙女が出てくる。

山田・早乙女「ふうー疲れたー！」

大家「何だ。やっぱり居たんじゃない」

山田「え？何がですか？」

大家「とぼけちゃって。今お客さん来てたでしょ？」

山田「そうだったんですか？」

早乙女「まさか新しい入居者？」

大家「違う違う。そんな話じゃないよ。あ、でも今度入居も勧めてみようかな」

山田「いやいや無駄ですよ。(辺りを見渡しながら) おそらくどうか絶対…入居しないですよ」

大家「そうかなー？ここ、良いところも沢山あるよ。家賃安いし…家賃安いよ？」

山田「それしか出てこないじゃないですか。ほらまた時計も落ちていきますし」

山田、落ちている掛け時計を壁に掛ける。

早乙女「私は好きだけどなーここ」

大家「そうだよねえ」

山田「別に私だって好きですよここ。(疲れた感じを出しながら) ただ、新しい人にはこの場所抵抗あると思うんですよ」

大家「大分疲れ溜まってそうだね。そういえばさつきも疲れたーって忙しいアピールして出てきたね」

山田「アピールって失礼な。私は昨日からずっと籠って原稿を書いていたんですよ。応募しようとしている漫画賞の期限も近いです。今はちょうど区切りもついたので息抜きに出てきただけです」

大家「それはお疲れ様」

早乙女「私だって同じだよ。昨日からずっと傷みそうなお酒を探して、全部飲んでいたんだから。美味しく飲める期限も近いし。今はちょうど区切りもついたので息抜きに出てきたんだよ」

大家「それはただの駄目人間だね」

山田「早乙女さん、私と一緒にしないでください。こっちは脱サラまでして本気でやって
いるんですから」

早乙女「何さー。キミ達を買ってきたお酒の残りを処理してあげてるのにー。寧ろ感謝して
ほしくらいだよ。うんうん」

大家「それじゃあ次からは僕がその役を引き受けるよ」

早乙女「それだけは勘弁してください。それだけが楽しみなんでさー」

山田「やっぱりただの駄目人間ですね」

大家「あ、そうだ。もうすぐ完成なんでしょその原稿？いつもみたいに読ませてよ」

山田「良いですよ」

山田、1の部屋に原稿を取りに戻る。

早乙女「懐からお酒を取り出しながら）そういえば私まだ山田の旦那の漫画ちゃんと読ん
だことないなあ」

大家「まだ飲むんだ。山田さんの漫画、面白いよ。男女の繊細な心情を描いた人間物語が
多くてね」

早乙女「へー確かに旦那、そういう真面目な話描くの上手そうだな」

山田、原稿とスケッチブックを持って部屋から出てくる。

山田「お待たせしました」

大家「先に早乙女さんが読みたいそうだよ」

早乙女「いいの？ありがとう」

早乙女、山田から原稿を受け取り読み始める。

早乙女「うん。うんうん、確かに男女の心が細かく描かれていて良い話だね。だけどそんな
繊細な物語に：なんでこんな独特なタッチの絵なの？」

早乙女、原稿を正面に向ける。その絵はものすごく独特な雰囲気（いき過ぎた劇画
タッチ風、ヘタではない）の絵。

大家「僕は逆に面白いと思うんだけどねえ」

山田「駄目でしょうか？」

早乙女「まあ私も嫌いじゃないけどさ」

渡辺 「うー…うー…うー…」

早乙女 「あれ？この声は？」

大家 「帰ってきたみたいだ」

下手から渡辺が入ってくる。色合いが独特な服を着ている。

渡辺 「うー…うー…うー…」

山田 「あーその様子ですと…」

早乙女 「うん…」

大家 「渡辺さん、ドラマのオーディションどうだったの？」

渡辺、顔をがばっと上げる。

渡辺 「この感じで受かってる訳ないじゃないですかー！今回も駄目でしたよー！」

山田・早乙女 「あちゃー」

渡辺 「くそー！結局は若さなのよ！結局は顔なのよ！結局演技力なんてどうだって良いのよー！私は監督にあんなに必死にアピールしたのに！鼻でうどんも食べたのに！」

山田 「いや鼻でうどん食べるのも演技力関係ないんじゃないですか？」

大家 「荒れてるねえ」

渡辺 「もうこうなったらヤケ酒ヤケ酒！大量に飲んでやる！早織！お酒持ってきて！」

早乙女 「あんまり飲み過ぎるのは良くないよ？」

大家・山田 「あなたが言わないでください」

早乙女 「あちゃー」

遠藤 「うっせー！！」

遠藤、2の部屋から勢いよく出てくる。スカジャンを着た、いかにもヤンキー風の出で立ちである。

遠藤 「お前らピーピーピーうるせえんだよ！集中してできねえだろうが！」

大家 「ごめんごめん。メンチ切る練習中だったよね」

遠藤 「そうそう、俺のメンチ切りは天下第一品、馬鹿やろ！ちげえよ！」

早乙女 「そうだよ。カツアゲの方でしょ？」

遠藤 「ちげえわ！もうそういうことはやってねえよ！」

渡辺 「もう、ってことは、昔はやっぱり…」

大家・早乙女・渡辺、ひそひそ話を始める。

遠藤 「余計な詮索すんなや！今は真つ当な浪人生なんだからよ！」

渡辺 「真つ当な浪人生って言い方も初めて聞くけど」

山田 「皆さんその辺にしましょうよ。遠藤君ごめんね、勉強の邪魔して」

遠藤 「勘弁してくれよ」

早乙女 「勉強ってヤンキー語録の暗記とか？」

遠藤 「なんだよその暗記！もう良いわそういう話は！勉強は勉強だよ！今は数学やって
たんだよ数学！因数分解を解いてたんだよ！」

早乙女 「つまんなーい」

遠藤 「うるせえ！」

渡辺 「顔に似合わないーい」

遠藤 「顔関係ないだろうが！俺が受験勉強して何が悪い！俺は大学行って生まれ変わる
んだよ！」

大家 「それで、勉強は順調なの？」

遠藤 「うっ…！この前の模試では…第一志望の大学、E判定だった…」

早乙女 「なんだー！よかったじゃん！いい判定、」

遠藤 「よい判定ってことじゃねえよ…アルファベットのEだよ！くだらねえこと言おう
とすんな！」

早乙女 「あちゃー」

大家 「それじゃあさ、山田さんどうかな？遠藤さんに勉強を教えてあげるってのは？」

山田 「原稿も一段落ついたので大丈夫ですよ」

遠藤 「あんな。問題つつーのはな、自分で解いて初めて意味があんだよ。俺には基本そう
いう信念があることは理解してもらって、でも今回は教えて」

大家 「大変素直でよろしいね」

山田 「では早速やりましょうか？」

早乙女 「まあまあまあ、そんなに焦っても勉強は逃げませんよ」

遠藤 「はあ？」

早乙女 「せっかく人も揃ったし、ヤンキー君も模試が良くなかったし、辺ちゃんもドラマの

オーディション駄目だったし、今から慰め会といこうじゃないか」

遠藤 「なんだよ？また駄目だったのか？鼻でうどん食べなかったのか？」

山田 「あなたの入れ知恵でしたか…」

渡辺、遠藤に恨めしそうな顔を向ける。

大家 「坂本さんは？」

山田 「部屋でトレーニングでしょうか？」

早乙女 「かもね。試合も近いみたいだからねー」

渡辺 「そうなんだ。早織って坂本君のこと色々知ってるよね」

早乙女 「まあねー」

遠藤 「お、噂をすればだぜ」

坂本、ランニングシャツ姿で固く真剣な顔をしながら上手階段からゆっくり降りてくる。

早乙女 「どうだいボクサー君！キミも一緒にヤンキー君と辺ちゃんを励まそうじゃないか！」

坂本、ジロツと早乙女に顔を向ける。

山田 「ま、まああまり無理には。彼にもトレーニング等の都合があると、」

坂本、椅子に座る。

遠藤 「参加するんかい」

山田 「相変わらず感情が分かりませんね」

早乙女 「トレーニングは順調なのかい？」

早乙女、坂本の隣に座る。位置が近い。坂本、渋い顔をして早乙女をじつと見る。その後頷く。

遠藤 「順調なのかい。いちいち紛らわしい顔と間を入れんじゃねーよ！」

早乙女 「でもそういうところがボクサー君の素敵なところだね！」

大家 「確かにそうだね」

渡辺 「えー…そうかなー？」

坂本、ジロツと渡辺に顔を向けるが何も言わないで顔を正面に向ける。

遠藤 「何もないんかい」

早乙女 「さあさ！それでは、はちぼち荘全員が揃ったところで！宴会を始めましょうか！」

遠藤 「宴会になっちゃったよ」

渡辺 「慰め会でしょー！（恨めしそうな顔をする）」

山田「あ！渡辺さんその顔良いですね！ちょっとそのままです！」

山田、スケッチブックに渡辺の顔を描き始める。

山田「これは良い表情ですね。流石は女優さん…はい、できた！」

山田、スケッチブックを皆に見せる。そこには劇画タッチ風でかなり誇張された恨めしそうな渡辺の顔が描かれている。

渡辺「全然似てないよ！」

早乙女「やっぱり女性の顔もそんな感じになっちゃうんだね」

山田「そうですか？でももつと渡辺さんの口をへの字にしてみらって、左の目ももつと大きく見開いてもらえば…」

渡辺、山田に言われた通りに顔を作る。

山田「ほら！」

大家「おお！」

遠藤「似てる！」

早乙女「モデルの方を近づかせるんだね」

渡辺「私で遊ばないですよ！」

山田「そんなつもりはないのですが」

渡辺「ほら！もう私の慰め会やるよ！」

早乙女「よしよし！それじゃあ各自準備といこうか！ボクサー君は、私と一緒に部屋からお酒持ってくるの手伝ってね」

坂本、渋い顔をして早乙女をじっと見る。その後頷く。

遠藤「もういいよそれは！」

大家「今日もうるさくなりそうだ」

6人、ワイワイと飲み会の準備をする。

徐々に暗転していく。

【二場】

明転。夕方なので薄暗い。掛け時計は床に落ちている。大家と立川が椅子に座って談笑している。

立川 「へーそんなことがあったんですか」

大家 「そうなんだよ。何かきっかけがあればあの人は、巣を突かれた蜂のようにわらわら出てくるんだから。まいつちやうよ」

立川 「でも大家さんも参加したんですよね？その宴会」

大家 「そうだよ」

立川 「ホントにまいつてます？」

大家 「あんまりまいつてない」

立川 「ほらー。楽しそうにずっと話してましたもん」

大家 「はははは」

立川 「でも良いですね、そういう雰囲気。楽しそうで」

大家 「それじゃあどうだい？立川さんもここに住んでみるっていうのは？」

立川 「私ですか？」

大家 「毎日騒がしいけど。家賃は格安だよ」

立川 「いやー…ははは」

大家 「今なら鍵が付いてる部屋にしてあげるよ」

立川 「やったー…って全部の部屋に鍵付いていないんですか？」

大家 「あの人はすぐ壊しちゃうんだもん」

立川 「ははは…プライバシーとかないんですね…。そういうばい今日もまだ電気は…？」

大家 「うーん、ごめんね。調子悪いみたい」

立川 「そうですか…」

大家 「でもね、嫌なことばかりでもないと思うよ。時に立川さん、結婚はしてる？」

立川 「いやー実は彼女も今いないんですよ」

大家 「だろうね」

立川 「すぐに納得されるのはなんか腹立ちますね」

大家 「ここは男女共同だからさ。若い子もいるんだよ」

立川 「あ、女性の方もいらっしやるんですか？」

大家 「食いついてきたね。このムツツリボーイめ」

立川 「へへへ…」

大家 「勿論女の子もいるよ。2人ね」

立川 「へー。ここだけの話、可愛いんですか？」

間

大家「可愛いよ」

立川「今変な間がありましたけど？」

大家、立川に『ぐっ！』と親指を立てる。

立川「なんですかその指は」

大家「どっちも可愛いよ。ちゃんとしたら可愛いよ、絶対」

立川「えー：ちゃんとしてどういう意味ですか」

大家「そこまで言うなら実際に見てみる？」

立川「そこまでは言っただけですけど。でも興味は出てきました。今日は皆さんいらっしやるんですか？」

大家「いるよいるよ、どうせいるよ。というかこの前だってちゃんと居たんだから」

立川「そうだったんですね」

大家「おーい！」

大家、部屋に呼びかけるが反応が無い。

大家「おーいみんなー！出てきなよー！お客さんが来てるよー！」

しかし反応が無い。大家、立ち上がり（椅子は動かさない）、1の部屋の前まで近づき、立川を手招きする。立川、大家の隣に行く。

立川「はい？」

大家「ちよつとノックしてごらん」

立川「え？私ですか？」

大家「うん。確か…次からはこれくらいやってくれて、言ってたから」

立川、戸惑いながらも1の部屋をノックする。

大家「おーい！」

立川、大家に促されながら、2と3の部屋もノックし、大家は部屋へ声をかける。

大家「おーい！」

しかし反応が無い。

大家「キミ、嫌われてるのかな？」

立川「え？私のせいですか？」

大家「もうちよつと強めに呼んでみるかな」

立川「まあ無理には大丈夫ですよ」

大家「おーい！なんかモテなさそうで金もなさそうな貧相な男が来てるからみんな見においでー！」

立川「なんてこと言うんですか！酷い！」

大家「こう言えば出てくるかなって。皆さん好奇心旺盛だから」

立川「そんな人を餌みたいに」

大家「でも出てこないなあ」

間

立川「あの…本当にいらっしやるんですか？」

大家「え？」

立川「あ、いえ、その…今日こそ皆様全員、出かけられているのではないかなーっと思ひまして」

大家「そんなこともないと思うんだけどね」

立川「そうですか…。しかしそろそろ時間も時間なので失礼しますね」

大家「そう。残念」

立川「次回こそはお会いしますよ」

大家「うん」

立川「ではこれで」

立川、下手からはけようとして立ち止まり、テーブルに置いてある資料を見る。

立川「あ、先ほど簡単にはお話ししましたが、詳しいことはその資料に書いてありますので、

次にお会いする時までには読んでおいてくださいね」

大家「ああ、うん」

立川「では今度こそこれで」

立川、下手からはける。

完全明転。

立川がはけると同時に、3つのドアが勢いよく開き、1の部屋から山田、2の部屋から遠藤、3の部屋から早乙女が出てくる。

山田・遠藤・早乙女「やったー！」

大家「居たんじゃーん」

山田・遠藤・早乙女の3人、しばらくテンション高めで会話を進める。

山田「え？そりゃあ居ますよ」

早乙女「何か用事？」

大家「いやこの前話したお客さんが来てたんだけどさ、今ちょうど帰ったところなんだよ」

山田「またいらしてたんですね」

遠藤「うん？その客つてもしかして大家の弟か？」

早乙女「え？あの子？」

大家「違うよ。それならそう言うよ。まあでも来月くらいに遊びに来るとは言ってるけど」

遠藤「そうかそうか。またからかってやるか」

早乙女「楽しみだね」

山田「それでは結局、今のお客さんは？」

遠藤「ああそうだ。そいつどんな奴なんだ？」

大家「そんなに気になるなら出てくればよかったのに」

遠藤「は？」

大家「僕は皆さんを紹介したかったんだよ」

遠藤「じゃあ呼んでくれよ」

大家「呼んだよ。皆さんちつとも出てこないだもん」

遠藤「そりゃあこちだつてみんな自分のこと集中してやってるからな」

山田「そうですね。次からはもう少し強く呼んで頂けると。例えばドアでも叩くとかして頂いて」

間

大家「今度はそうするよ」

山田「あ、また時計が落ちていますね」

山田、掛け時計を元の位置に掛け直す。

早乙女「ねえねえ。そろそろその話は良いんじゃない？（ウキウキしている）」

遠藤「なんだよアルコール女、さっきからウキウキしてよ（ウキウキしている）」

山田「そういう遠藤君こそ（ウキウキしている）」

早乙女「山田の旦那こそー（ウキウキしている）」

山田・遠藤・早乙女の3人、大家の顔を見る。

大家「はいはい、聞いてあげるから。皆さんさっき、やったー！って出てきたけどどうしたの？」

山田・遠藤「それ聞いちやう？」

早乙女「ハモったー。ちよっとキモイ」

遠藤「うわ！お前だけ逃げやがって！」

早乙女「いくらウキウキしてるからって節度は守ろうよ節度は」

遠藤「なにー？」

大家「お話がないのなら僕は部屋に戻るね」

大家、上手手前からはけようとする。

遠藤「おいおい！そりゃねえぜ！」

大家「だったら早く話してよ」

山田「ごほん、では私から。実はですね、先日投稿した漫画、なんとマルハツ出版の編集者の目に留まりました、今度雑誌に載せて頂くことになったんですよ！」

遠藤・早乙女「ええー！」

遠藤「お前のあの漫画、通ったのか」

早乙女「あの独特な絵柄を採用したのは一体どんな雑誌なんだい？」

山田「りぼんです」

遠藤「りぼん？りぼんってあの少女漫画の登竜門的雑誌じゃねえか！そこにお前のあの

絵が載るのか？華やかしさが売りのりぼんの色に…全然似合わねえー！」

大家「どうか遠藤さん詳しいね？」

遠藤「俺は少女漫画好きだからな」

早乙女「そっちも全然似合わないね」

大家「まあでも劇画タッチの少女漫画とかもあるじゃない」

遠藤「こいつの絵はそういうレベルじゃないと思うぜ…」

山田「編集者さんには新しい風を吹き荒らしたいとおっしゃって頂きますよ。先ほど部屋でその電話を受けたんですよ」

大家「うんうん。確かにあの繊細な内容自体は少女漫画に合ってるのかもね。とにかくおめでとう山田さん」

山田「ありがとうございます」

早乙女「よしよしそれじゃあ、早速お祝いといこうか？」

遠藤「待て待てアルコール女。お祝いにいくのは少し早いんじゃないか？まだ山田しか話してないんだぜ？」

山田「はいはい、ちゃんと聞きますよ」

大家「うん、早乙女さんはどうしたの？」

遠藤、少しずっこける。

早乙女「えつとねー」

遠藤「おい。この流れだとまずは俺からだろ？」

大家「なんかもったいぶるから。じゃあ、遠藤さんは？」

遠藤「くつくくく…これを見る！」

遠藤、懐から書類を取り出し、3人に見せる。

大家・山田・早乙女「何々？果たし状…？おい遠藤、明日の17時に川原へ来い、タイマンで決着を、」

遠藤「これじゃないこれじゃない」

遠藤、慌ててその書類をしまう。

早乙女「今時果たし状って」

山田「しかも時間17時からって。相手、遠藤君と喧嘩した後夕日見て仲良くなる気満々じゃないですか」

大家「というかもらった果たし状を大事に取っておいてるんだね、遠藤さん」

遠藤「色々うるせえな！恥ずかしいわ！もう昔の話だから！」

遠藤、懐から違う書類を取り出す。

遠藤「こっちこっち！」

大家・山田・早乙女「えつと、全国共通模試、結果…第一志望大学…C判定!!!」

遠藤「どうだ」

大家・山田・早乙女「微妙!!!」

遠藤 「うるせえ！俺にとつてはものすっごいテンション上がったよ！」

山田 「でもまあ少し前のE判定に比べましたら」

大家 「大分進歩したねえ。おめでどう」

遠藤 「おう」

早乙女 「よしよしよし！それじゃあ今度こそお祝いだー、」

渡辺 「うー…うー…うー…」

遠藤 「この声は…！」

山田 「この地の底からはい上がるような声は…！」

渡辺、下手からトボトボ入ってくる。

早乙女 「辺ちゃん…」

遠藤 「あの感じは…」

山田 「そういうことでしょうね…」

渡辺 「トボトボ…トボトボ…」

遠藤 「自分でトボトボ言いながら歩いてるし…。お前（山田）ちょっと声かけてこいよ」

山田 「嫌ですよ…。早乙女さん」

早乙女 「ええ？私もちよつとなー…」

渡辺、4人の方を向く。

間

大家 「渡辺さん、オーディション駄目だったの？」

山田・遠藤・早乙女 「おお…！」

遠藤 「何という直球…！」

山田 「エグイですね大家さん…！」

渡辺、首を横に振る。

山田・遠藤・早乙女 「ああ…あ？」

大家 「駄目だったの？」

渡辺、首を横に振る。

大家 「…ということとは？」

渡辺 「受かった」

山田・遠藤・早乙女 「え？」

渡辺 「受かったのよー！ドラマのオーディション！」

山田・遠藤・早乙女 「えー！！」

遠藤 「そうか…お前とうとう…現実と妄想の区別もつかなくなっちゃったのか？」

渡辺 「なんでよ！ホントに受かったの！」

大家 「おめでとう、渡辺さん」

渡辺 「ありがとうございます！」

遠藤 「おいおいおい」

早乙女 「それじゃあさっきまでの様子は？」

渡辺 「名演技だったでしょ？」

早乙女 「あちゃー。まんまと騙されちゃった」

遠藤 「んだよーくそー。渡辺のやろうに騙されるとはなー」

渡辺 「いつかこれやってやりたかったのよ」

遠藤 「なんか汚い手を使ったのか？」

渡辺 「だからなんでよ！実力よ実力！今度の監督にね、鼻でうどん食べるのがすごいウケたの！」

山田 「やっぱりちよつと邪道ですね」

渡辺 「そういう何でもやろうっていう気概が気に入られたのよ。ま、少しはあんた（遠藤）

のおかげでもあるわ。ありがとう」

遠藤 「…おう」

山田 「いやしかし、本当におめでとうございます」

渡辺 「ありがとう！」

早乙女 「よーしよしよし！それじゃあ今度の今度こそお祝いねー！」

大家 「そういえば早乙女さんが喜んでいたのは何だったの？」

山田 「ああそうですね」

遠藤 「どうせくだらないことだろ。飲んだと思った酒がなくなってたとか」

早乙女 「…えっとね、実は」

早乙女、もじもじし始める。

遠藤 「え？何その反応？」

渡辺 「何々？気になるわね」

坂本、3の部屋から出てくる。全員、坂本を見る。

大家「坂本さん、どうして早乙女さんの部屋から？」

全員、少し照れた坂本ともじもじしている早乙女を見比べる。

山田「え？」

遠藤「まさか…」

渡辺「嘘でしょ…」

大家「坂本さん…駄目ですよ勝手に女性の部屋に入ったら」

山田・遠藤・渡辺「違う違う！」

早乙女「実は私、今日からボクサー君とお付き合いすることになりましたー！」

坂本、頷く。

山田・遠藤・渡辺「えーっ！」

大家「そういうことかあ。おめでとう、お二人さん」

早乙女「ありがとう大家さん」

渡辺「何よーちよっといつからー」

渡辺、早乙女を軽く叩く。

早乙女「へっへっへー」

遠藤「何だよお前（坂本）、やることしっかりやってんだな」

遠藤、坂本を軽く叩く。坂本、遠藤を反射的に殴り返す。

遠藤「いって！おい！駄目なんだぞ！ボクサーが一般人殴っちゃ！」

渡辺「でも確か…試合もうすぐなんだっけ？」

遠藤「そんなじゃトレーニングに身が入らねえんじゃねえか？」

早乙女「ああ大丈夫大丈夫」

遠藤「え？」

早乙女「その試合勝ったから」

遠藤「はい？」

大家「昨日がちょうどその試合だったんだよ」

山田「大家さんも観に行かれていたのですね？」

大家「うん。でも早乙女さんとはたまたま会っただけなんだけどね」

渡辺「その時点で二人の関係を怪しみませんと」

遠藤 「ニブいなー大家は」

大家 「えー？そうかなー？」

早乙女 「ボクサー君カッコ良かったんだよー」

坂本、照れる。

早乙女 「これでこのまま順調にいけば、あと少しでチャンピオンとの試合だよ！」

坂本、やる気に満ちている。

遠藤 「すげーじゃんお前！」

山田 「それでは今度はみんなで応援にいきましょうか」

大家 「そうだね。横断幕でも作ろうか」

渡辺 「大家さん…それはやり過ぎですよ」

早乙女 「ではではそろそろ！結局全員おめでたいということ！今度の今度の今度こそ！お祝いだー！」

6人、各自に準備を始める。

渡辺 「そういえば大家さんは何かないんですか？おめでたいこと」

大家 「あるある。5つも」

渡辺 「そんなに？なんですか？」

大家 「皆さんにおめでたいことがあったっていうことかな。だから5つ」

渡辺 「えーなんですかそれー」

徐々に暗転していく。

【三場】

立川「失礼しまーす」

明転。午前なのでいつもより明るい。下手から立川と立川の後輩（以下内山）が入ってくる。内山もスーツ姿。掛け時計は床に落ちている。

立川「あれ？大家さーん！いらっしやいませんか？」

反応が無い。

立川「おかしいな」

内山「約束した日時は合っていますか？」

立川「合ってる合ってる」

立川、手帳を取り出し確認する。

立川「間違いないよ、今日の10時で」

内山「じゃあおかしいですね」

立川「うーん…あの大家さん、ちょっと抜けてそうだからなあ。時間、勘違いしてるのかも。夜の10時とか」

内山「流石にそれはないんじゃないですか？」

立川「でも前2回はどっちも夕方だったからさ、もしかしたら夜と間違えてる可能性も…」
内山「なるほど…あれ？」

内山、テーブルの上に置かれた資料と名刺に気が付く。

内山「資料おきっぱなしですよ」

立川「ホントだ。というか名刺も…」

内山「立川先輩…嫌われてるんじゃないですか？」

立川「やめてくれよ」

内山「今日いらっしやらないのもそういう理由じゃないですか？」

立川「違う違う！大家さんは時間を間違えているだけだ！俺はそう信じてい…」

内山「じゃあどうします？出直しますか？」

立川、考える。

間

内山「おいー！」

内山、立川の背中を叩く。

内山「出直すのかって」

立川「いってーな！今考えてるんだろ」

内山「はい」

立川「というか内山、今の後輩の態度じゃねーだろ」

内山「すみません、無視されているのかと思ひまして。それで、どうするんですか？」

立川「出直すよ」

内山「分かりました」

立川「ただ…ちよつとだけアパートの中、見てからな」

内山「え？」

立川「ちよつとだけな。このアパート、少し気になるんだよ」

内山「気になる？」

立川「ああ。だから少し調べてみようかなって」

内山「良いんですか？怒られても知りませんよ」

立川「奥の部屋が大家さんの部屋らしいから、まずはそこ覗いてみるわ。内山はアパートの外で見張っててくれ」

内山「見張り立てるってことはやっぱ悪いことしてる自覚あるんじゃないですか」

立川、上手手前へはける。

内山「まったく」

内山、下手からはける。立川と内山がはけると同時に、1の部屋から山田、2の部屋から遠藤が出てくる。

山田・遠藤「はー…：…うん？」

山田と遠藤、顔を合わせる。

遠藤「何だよ？随分深刻そうじゃねえか？」

山田「そういうあなたの方こそ」

遠藤「まあな。なんつーかよ…まさか俺がこんな気持ちになるなんて、と思ってさ」

山田「分かります。せっかく担当さんが付いて、次の作品に向けてのお話もしているのに…中々捗りません」

遠藤「俺もだ。このままだと勉強も手につかなくなりそうだ。あいつは俺達を惑わせる、天使のフリをした悪魔だぜ…」

山田「あー」

山田・遠藤「アイドルの SAOSAO ちゃん可愛いー！」

山田「この年になってまさか1人のアイドルをこんなにも好きになってしまうとは」
遠藤「くっそー不覚にもだぜ」

坂本、上手階段から降りてくる。

山田「あ、坂本さん」

遠藤「おう坂本！お前、SAOSAO って知ってるか？」

坂本、首を横に振る。

遠藤「何だよー遅れてんな」

山田「まあ坂本さんには早乙女さんがいらっしやいますから」

遠藤「へーへー」

坂本、じっと2人を見ている。

山田「ああえっと、SAOSAO というのは今流行っているアイドルのことです。すごい可愛らしいんですよ」

遠藤「半年前突如としてこの世に現れた新星アイドル SAOSAOー！」

山田「実は昔からやっていたという噂もあります」

遠藤「まあそんな噂はどうでも良い！とにかく良い女なんだ！このしみったれた女どもとは何もかもが大違いだぜ」

坂本、遠藤を殴る。

遠藤「いって！別にアルコール女の悪口言った訳じゃねえだろ！」

山田「いやほぼ悪口でしたよ」

坂本、遠藤を睨んでいる。

遠藤 「おーおーお熱いことで。じゃあ俺達は俺達で楽しみましようよ山田ちゃんよお」
山田 「何です？」

遠藤 「俺の部屋によ、昨日発売した SAOSAO の写真集があんのよ」

山田 「え？ マジですか？」

遠藤 「マジマジ。しかも限定盤。仕方ねえからお前にも見せて、」

山田、遠藤の話が終わらないうちに遠藤（2）の部屋へ入る。

遠藤 「焦んな焦んな。写真集は逃げやしねーよ」

遠藤と坂本も（2の）部屋へ入る。

遠藤 「いや坂本お前も来んのかい！」

上手手前から立川、下手から内山が戻ってくる。

内山 「どうでした？」

立川 「やっぱり居なかったなー大家さん。随分と奥の方まで行っちゃったよ」

内山 「けっこう広いんですか？」

立川 「ああ、意外と。でもあれだな…奥はここよりもっと古いというか…さらに汚かったな」

内山 「え？ここよりもですか？」

立川 「ああ」

内山 「こんなこと言うのもアレなんですけど、ホントに人、住んでいるんですか？」

立川、考える。

間

内山 「住んでんのかって！」

内山、立川の背中を叩く。

立川 「いってえな！だからそれやめろ！」

内山「つい」

立川「つい、じゃねえよ。あのな、俺だって少しおかしいなって思ってるんだよ、そのことに関しては」

内山「全然生活感ないですもんねえ」

立川「ああ」

内山「じゃあもういつそ…部屋の中とか少し覗いちゃいます？」

立川「うーん…そうだなあ。流石に住人の部屋となると少し気が引けるけど…」

内山「大家さんの部屋には行ったくせに。そもそも僕達の仕事はそういう調査も含まれて
いますから大丈夫ですよ」

立川「…そうだな。もし人がいてもそれで押し通すか」

内山「よし！それじゃあ行くぞ！」

立川「はい！っておい、立場関係逆になってるぞ！おい！」

立川と内山、3の部屋へ入る。それと同時に2の部屋から山田・遠藤・坂本が出てくる。遠藤、写真集を持っている。

遠藤「やっぱり良いねーSAOSAOー」

山田、遠藤の持つ写真集を見る。

山田「やはり表紙にもなっているSAOSAOポーズが可愛いんですよね」

間

山田と遠藤、坂本に向かってSAOSAOポーズ（※左腕は真っ直ぐ伸ばし、右腕は右手が顔に触れるように折る。両手の指は、中指だけ折り残りの指は開く。ちょうど右目が折れた中指から覗くような感じ）を取る。

山田・遠藤「きやは☆」

坂本、渋い顔でじっと2人を見る。その後坂本もSAOSAOポーズを取る。

遠藤「良いじゃねえかボクサー！」

坂本、2人に何かジェスチャーで伝えようとする。

遠藤 「何だよ？」

山田 「何々？ふむふむ…遠藤さんには大変良いものを見せてもらった。お礼といっってはなんだが自分も見せたいものがある。部屋に来ないか？ですって」

坂本、笑顔で『ぐっ！』と親指を立てる。

遠藤 「なんで分かるんだよ！」

山田 「雰囲気ですよ雰囲気」

坂本、付いてこいと手招きし、上手の階段へと進む。遠藤はテーブルに写真集を置き、山田と共に坂本に続く。3人がはけるのと同時に、3の部屋から立川と内山が出てくる。

内山 「うーん、やっぱり誰も居なかったですねえ」

立川 「生活感も…なかったし」

内山 「なぜかアルコール類が少しありましたね」

立川 「まあ全部古かったけど」

内山 「残念でしたね」

立川 「ああ…いや別に古くなくても飲まないからね」

内山 「え？」

立川 「なんで少し飲む気あったんだよ。一応仕事でだぞ」

内山 「よし、次は隣の部屋へ行きましょう先輩！」

立川 「なんでちよっとノリノリになってきてんだよお前」

立川と内山、2の部屋へ入る。山田・遠藤・坂本の3人、上手階段から降りてくる。

遠藤 「何だよ。お前も少し古いがけっこうそっち系持ってるんだな！」

坂本、照れる動作。

山田 「坂本さんの意外な一面を見られてよかったです。では今度はあそこは SAOSAO 関係が増えるのではないですか？」

坂本、ニヤリと笑う。

遠藤 「よしよし、2人ともよく聞いてくれ」

山田「はい？」

遠藤「実は俺にはもう一つとっておきがあるんだが…まあお前らとの友好の証として、特別に見せてやろう」

山田「それはそれは…大変ありがとうございます」

遠藤「部屋行って取ってくるから、ちょっと待ってな」

遠藤、2の部屋へ入ろうとし、ドアノブに手をかける。

山田「しかし、待ってください」

遠藤「うん？」

山田「その前に、私のとっておきの SAOSAO グッズをお見せしましょう。私だけまだ、あなた達にも貢献できていないですからね」

遠藤「へっ…別に気にしちゃあいねえが…お前がそう言うならな」

坂本、山田の肩に手を置く。

山田「さあ、私のお部屋へご案内致しますよ。とびきりの紳士の皆さん」

山田を先頭に遠藤、坂本の3人、1の部屋へ入る。立川と内山、2の部屋から出てくる。

立川「居ないな」

内山「居ませんね」

立川「ポスターとかは貼ってあるけど…やっぱり古いし」

内山「勿論生活感ありませんでしたね」

立川「さて、残りは…」

立川と内山、1の部屋を見る。

内山「さっさと調べますか」

内山、1の部屋へ入ろうとする。

立川「まあ待て待て」

内山「何ですか？」

立川「なーんか良くない気がするんだよなあ。今その部屋に入るのは」

内山 「今更何言ってるんですか。ビビったんですか先輩？」

立川 「いや、そういうことじゃなくてだな…なんか分かんないけど、今は入っちゃいけないような気がするんだよなあ…」

内山 「よく分かりませぬね」

立川 「うーん…まだ早いというか」

内山 「何言ってるんですか？じゃあもう先輩はいいです。そこで見張っててください」

内山、1の部屋のドアノブに手をかける。

立川 「おい！」

内山 「…あれ？」

立川 「どうした？」

内山 「なんか…鍵が掛かってます」

立川 「セーフ！」

内山 「はあ？」

立川 「いや…なんとなく」

内山 「なんでこの部屋だけ…」

立川 「きつちりした性格の人がこの部屋の主なんじゃないの？誰にでも敬語使うみたいなさ」

内山 「なんかやけに具体的ですね。しかしそうなる…この部屋余計気になる」

立川 「鍵が掛かっているってことは…やっぱり誰か住んでるのかなー」

内山 「しかし人が住んでいそうな感じも物もありませんけどね。どうしますか？部屋も調べましたし、今日はもう帰りますか？」

立川、考える。

間

内山、ゆっくり立川の後ろへ移動するが、ぱっ！と後ろを振り向く立川。

内山 「うち」

立川 「あぶねー。もう叩かれるかよ」

内山 「それでどうするんですか？」

立川 「…よし！ここまで来たなら乗りかかった船だ！2階も調べにいこう！」

内山 「さっきまでの及び腰はどこいったんですか」

立川 「いや、なんか今なら2階は行っても大丈夫な気がするんだ」

内山 「はあ？」

立川 「よし、行くぞ」

内山 「分かりましたよ」

立川と内山、上手の階段からはける。2人がはけると同時に、下手から早乙女が入ってくる。髪をゴムで結んでいる。早乙女、テーブルに置いてある写真集を見つけ、手に取って見る。

間

早乙女、SAOSAO ポーズを取る。それと同時に、下手から渡辺が入ってくる。渡辺の手には封筒が2つ握られている。

渡辺 「ただいまー…早織？何やってるの？」

早乙女 「練習ー」

渡辺 「練習？あ、そのポーズ…SAOSAOでしょ？私も、ほらー」

渡辺、SAOSAO ポーズを取る。しかし若干間違えている。

早乙女 「それねーちょっと違うんだよ」

渡辺 「え？」

早乙女 「みんな薬指折っちゃうんだけど、ホントは中指折るんだよー」

渡辺 「へー」

早乙女 「あと…顔も違うかな」

渡辺 「いや顔は仕方ないでしょ。やめてよ早織まで。でもけっこう詳しいんだね」

早乙女 「まあね」

渡辺 「SAOSAO 好きだったんだ。それじゃあそんなあなたに朗報です」

早乙女 「何々？」

渡辺 「なんと！この前私がかかったオーディションのドラマに、ゲストで SAOSAO が出演するのです！」

早乙女 「えー！辺ちゃんそのドラマに出るの？」

渡辺 「そういう事！そして今そのドラマの脚本が届いたのです！（封筒を見せる）でもなぜか表のポストに2つも届いて、」

山田、勢い良く1の部屋から出てくる。

山田 「SAOSAO の話をしている気がしますー」

渡辺 「うわ、びっくりした。何？山田さん、SAOSAO のファンなんですか？」

遠藤 「そうだぜ」

遠藤と坂本も1の部屋から出てくる。遠藤、その手にSAOSAOの巨大ポスターを持っている。

遠藤 「しかもこんな良いもん持ってるくらいの猛者だぜ。だけどよ…（持っているポスターを裏返すと劇画タッチ風ですごくいい表情をしているSAOSAOが描かれている）なんで裏にお前の絵でSAOSAOを描いちやうんだよー」

山田 「いやー創作意欲が湧いてしまいました」

渡辺 「すごい顔してるな…」

遠藤 「でもこの表情…お前（渡辺）に似てないか？」

渡辺 「出たよその流れ！今度はやらないからね！」

遠藤 「んだよーノリ悪いなー」

渡辺 「たまには早織にやらせなさいよ」

早乙女 「えー？しょうがないなー」

早乙女、眼鏡と髪を結んでいるゴムを外し、絵と同じ表情を取る。

遠藤 「お、思ったたより似てるな」

渡辺 「そうね…ちよっとだけ悔しい気持ちになってる自分が嫌だな」

山田 「うん？」

山田、遠藤の持っているポスターを表に戻す。そしてSAOSAOの顔と早乙女の顔を見比べる。

山田 「どうか寧ろ…こちらの方が似ている気がするのですが…」

渡辺 「言われてみると確かに…」

早乙女 「まあ、もういっか」

渡辺 「え？」

早乙女 「そりゃあ似てるよ。だって私がSAOSAOだもん」

間

山田・遠藤・渡辺 「は？」

遠藤 「酒の飲み過ぎで頭イカレたのか？」

早乙女 「ひどーい。だってほら、届いたドラマの脚本、もう1つは私のなんだよ。ゲストで出るから」

渡辺 「ホントだ…宛名、早乙女沙織になってる…！うん？早乙女沙織…？」

山田 「略すと…」

早乙女 「そうです！早乙女沙織、略してSAOSAOです！みんな黙っててごめんね！きやは☆」

早乙女、SAOSAO ポーズを取る。 4人、ポスターと早乙女の顔を見比べる。

間

4人、早乙女の顔を見る。

山田・遠藤・渡辺・坂本 「えー…」（坂本が一番声を大きく）

山田・遠藤・渡辺の3人、坂本を見る。

山田・遠藤・渡辺 「えー…」 喋ったー！

早乙女 「そりゃあ喋る時もあるよー」

山田 「どうか坂本さん、あなたも知らなかったんですね…」

坂本、何度も頷く。

渡辺 「うそ…ホントに？」

遠藤 「信じられねえ…この女が…SAOSAOなのかよ…！せっかく昨日あんな行列並んで限定盤買ったつてのによ…！」

早乙女 「これヤンキー君のだったんだ。ありがとー！写真集にサインしてあげよっか？」

遠藤 「いらねえよ！」

山田 「私のグッズにはサインして頂いてもよろしいですか？」

遠藤 「お前はもううんかい！」

早乙女 「良いよー」

山田 「遠藤君、こういうのは切り替えます。早乙女さんとSAOSAOはまったく別の生き物と考えるんですよ」

遠藤 「俺はそんな都合の良い頭はしてないぜ…」

渡辺 「でもなんで今まで隠してたの？」

早乙女「いやー中々言うタイミングがねー。それに、このこと知られちゃったら…今までと同じようにならなくなっちゃうのかなーと思って」

渡辺「え？」

早乙女「私実はね、前にも一回アイドルやってたんだよ。アイドルの世界はさ、私の知らないことで溢れてて、本当に楽しかった」

山田「それでは昔もやっていたという噂は本当だったんですね」

早乙女「うん。でもさ…段々みんなアイドルとしての私しか見てくれなくなって。仲のよかった友達も、両親さえもそうなくなっちゃって。私本当の自分が分からなくなってきちゃって…自分がなくなっちゃうのが恐くて。気が付いたらその世界から逃げ出していたんだ」

渡辺「そうだったの…」

山田「そしてたどり着いた先が、このはちぼち荘だったという訳ですか？」

早乙女「うん。ここはさ、詳しい理由も素性も聞かないで住まわせてくれて。ホント大家さんには感謝してるんだよね」

遠藤「俺の時もそうだったな」

早乙女「そしてみんなも。こんなどうしようもない私に正面から接してくれて。受け入れてくれて。嬉しかった。だから段々と本当の自分も取り戻せたんだ。そして、みんなのおかげで、私はもう一度アイドルとして復帰できたんだ。本当にありがとう。だからね…その…さ、」

遠藤「ようはこれからも俺達に同じように接してくれてことだろ？」

早乙女「うん…」

遠藤「アホか」

早乙女「え？」

遠藤「なんで今更俺がお前みたいなアルコール女に気使わなくちゃならねえんだよ」

早乙女「ヤンキー君…」

渡辺「まったく…もつと優しい言い方できない訳？」

遠藤「へっ」

渡辺「でもその通りだよ早織。何も心配いらんよ。私達はこれからも何も変わらない」

早乙女「辺ちゃん…」

渡辺「だからみんな！私が女優で有名になっても、変わらず接してくれて良いんだからね？」

遠藤「うん」

渡辺「なんかテキストに流したね？」

山田「早乙女さん、皆さんの言う通りです。しかし…ひと月に一回くらい、はちぼち荘に SAOSAO がやって来る日を作って頂けませんか？」

遠藤「欲望に忠実かお前！」

坂本、じっと早乙女を見ている。

早乙女「ボクサー君も…今まで秘密にしておいてごめんね。どうしても、言い出せなくて…」

坂本、早乙女の肩に手を置いて首をゆっくり横に振る。

坂本「ここでは…ありのままのキミで良いんだよ」

早乙女「ありがとう…ボクサー君。そしてみんなも！うん、分かった！私、これからはちぼち荘ではお酒ガンガン飲んでグータラしてるね！」

遠藤「それは少し自重しろよ」

早乙女「あちゃー」

渡辺「坂本君とのこと、バレないようにしなさいよ？」

早乙女「うん。そういうのはここでだけにするから」

山田「しかし大家さん、このこと知ったらどういう反応するんでしょうね？」

遠藤「案外あの大家、気付いているかもしれないぜ？」

渡辺「そう？大家さんそういうの鈍そうだよー？」

遠藤「それもそっか」

5人、笑う。

下手から大家の弟が入ってくる。なぜか大家より少しだけ老けた見た目をしてい
る。ラフな格好。

大家弟「久しぶりだな」

5人、大家弟の方を見る。

山田「おや、大家さんの弟さんではないですか」

遠藤「なんだ。今日が来る日だったのか」

渡辺「元気だった？」

大家弟「ここも変わらないな」

早乙女「あはは。そりゃひと月やそこらじゃそうだよー」

大家弟、上手手前へはけようとする。

山田「大家さんはちょうど今出かけてしまっていますよ？」

大家弟、そのままはける。

早乙女「それじゃあ弟君も来たことだし！改めてはちぼち荘みんなの絆も確認できたし！

今日はこのまま宴会といきましょうか？」

遠藤「なんでお前が仕切ってんだよ」

山田「すっかり元気になってよかったじゃないですか」

早乙女「大家さんが戻ってくるまでにちやっつと準備しちゃおう。ボクサー君と一緒に
お酒を運ぶよ」

坂本、頷き、早乙女と一緒に3の部屋へ入る。

渡辺「それじゃあ私達はコンビニでつまめるものをテキストに買って来ちゃいましょう」
遠藤「行くか」

山田・遠藤・渡辺の3人、下手からはける。それと同時に、立川と内山、上手階段
から降りてくる。

内山「2階にも誰も居ませんでしたね」

立川「鍵は掛かってなかったんだけどなあ」

内山「しかし結局どこも変わらず、でしたね」

立川と内山、辺りを見回す。

内山「はっきり言って、とても人が暮らしているとは」

上手手前から大家弟が戻ってくるが、立川と内山に気付かれないように陰に隠れ
て、2人の様子を伺っている。

立川「内山。また出直す。そしてもう一度、ちゃんと大家さんと話をしよう」

内山「はい、頑張ってください」

立川「ああ。…いやお前も付いて来るんだよ！」

立川と内山、下手からはける。大家弟、テーブルに置いてある名刺を手取る。

「アパートメント…コメディ or ミステリー？」

大家弟「そうか…あの人達が」

暗転。

【四場】

明転。夕方なので薄暗い。大家と立川、内山の3人が椅子に座っている。掛け時計は床に落ちている。

大家「それで、そちらのお人は？」

立川「こいつは内山と言って、私の後輩です。今日は勉強のために連れて参りました」

内山「よろしく願います」

大家「はいよろしく。私はこの大家です」

内山「先日もお伺いしたのですが、いらっしやらないようでしたので」

立川「おい内山」

大家「いやーこの前はごめんね。時間をすっかり勘違いしていたよ。まさか午前の10時だったとは！はははは」

立川「いえいえ、構いませんよ」

大家「朝から昼間は基本的に出かけていてね。ここには居ないんだよ」

立川「そうだったんですね。次回からは気を付けます」

大家「それで…私が居ない時に、まさか勝手に中を覗いたりしてないよね？」

間

立川「まさかー」

内山「しましたよ」

立川「おい内山！」

大家「え？」

内山「この共有スペースを少し拝見させて頂きました。趣があり歴史を感じさせる建物だという印象を受けました」

大家「ああ、そういうことね」

内山「はい」

立川「勿論、お部屋の中とかには入っていませんので、ね」

内山「立川先輩、何を当たり前のことをおっしゃっているのですか。可笑しなお人だ。はははは」

立川、内山を睨みつける。

大家「しかし、歴史あるとは良い言い方だ。気に入ったよ」

内山「ありがとうございます。しかし…歴史あるということとはさらに言い換えれば古い、

というところでもあります」

大家「うん？」

立川、内山を手で制する。

立川「大家さん、本日は真剣なお話をさせて頂きます」

大家「いつもはふざけていたのかい？」

立川「このアパート、はちぼち荘取り壊しについてのご提案です」

大家「…やっぱりふざけてるじゃないか」

立川「真剣なお話です。先日お渡しした資料はご覧頂けましたよね？」

大家「…ごめん、忙しくてね。まだ読んでいないんだよ」

立川「大家さん、そろそろそういうのは勘弁してください。この前お会いした時にも簡単にはお話ししたではありませんか」

大家「……」

立川「本当は我々のご提案したい内容、お分かりになってるんですよ？」

大家「…しかしね。急にそんなことを言われても困るよ」

立川「むしろ今までそのようなお話がなかったことが驚きなんです。このように古く、あちこち傷んでいるような建物、残っている方がおかしいですよ」

大家「そんなことは無い。古く多少傷んでいることは認めるが建て壊すほどではない。それにここには何人もの住人達がいる。急に出ていけと言っても、彼らだって納得しないだろう」

間

立川「そのことなのですが…」

大家「なに？」

立川「失礼ですが…本当にいらっしゃるんですか？」

大家「どういふこと？」

立川「その住人さんのことです」

大家「突然何を言い出すんだ？」

内山「まったく人が暮らしている気配がないと言っているんですよ」

立川「内山」

大家「暮らしているに決まってるだろう。何を根拠に」

内山「ですから、あまりにも生活感がなさすぎるんですよ。このアパートに。…部屋の中に」

大家「何だって？やはり勝手に部屋へ入ったのか？不法侵入だ！」

立川「やめろ内山。大変申し訳ございませんでした大家さん」

大家「立川さんキミも入ったのか？ どうなっているんだ！警察を呼ぶよ！」

立川「しかしですね。このままいくと、大家さんも我々へ虚偽発言をしたことになってしましますよ？」

大家「僕は何も嘘をついちゃいない！彼らは5人！ここで暮らしているんだ！」

立川「そのことは、こちらがこれから役所などできちんと調べればすぐに分かることですよ？」

大家「なんだ？僕を脅しているのか？」

立川「違います。私共はただ大家さんから本当のことをお話頂きたいだけで、」

大家「だから本当だと言っているだろう！」

内山「お話になりませんね」

立川「内山、もう喋るな」

大家「もういい！！出ていけ！もう帰ってくれ！」

立川「…分かりました。今日は帰ります。また近いうちにお伺いします」

大家「もう来ないでくれ！」

立川「…お話、きちんとお考えになってくださいね」

大家「帰れ！」

立川と内山、下手からはける。2人がはけてもいつものように部屋から住人が出てくることはない。

大家「ふざけるな…ふざけるなよ…！居るんだよ…！彼らは…本当に居るんだよ…。5人は今も何も変わらずこのはちぼち荘で暮らしているんだよ…！そうだろ？その通りだろ？…さあ！皆さん！話は聞いていたんだろう？出てくるんだ！！さあ！いつものように皆さん！揃って！出てきなさいよ！！」

徐々に暗転していく。

完全明転。

掛け時計は元の位置に掛けられている。椅子には大家・山田・遠藤・渡辺・早乙女・坂本の6人が全員座っている。

山田「え？またそのお客さん来てらしたんですか？」

大家「そうだよ。キミ達はホント毎回毎回、間が悪いよね。狙ってるの？」

5人「いやいやまさか（坂本はジェスチャーで）」

渡辺 「それにしても大家さん、いつもその人と何のお話をしているんですか？」

早乙女 「そうそう。私もちよつと気になってたんだ」

大家 「そうだね。そろそろみんなに話しても良いかな」

早乙女 「何々？」

渡辺 「もったいぶらないでくださいよー」

大家 「このアパートの話なんだけどね」

遠藤 「はちぼち荘のことか？」

大家 「うん。なんだかはちぼち荘を、もっと良いアパートにできるとかなんとか」

渡辺 「それって…」

山田 「新装、改装ってことですか？」

大家 「うん、まあそんな感じだと思うよ」

山田 「大家さん…ふわつとしてますね」

早乙女 「実は大家さんもあんまり良く分かってないんでしょー？」

大家 「なにおう！その通りだわ！」

遠藤 「何だよそれ」

渡辺 「でも改装かーそれも有りかもね」

遠藤 「ここもだいたい古臭くなってきたてはいるが」

早乙女 「それはそうだけどさ。私は…けっこうこの雰囲気好きなんだよね」

坂本も頷く。

山田 「そうですね。何だかんだで、やっぱり私も好きですここ。愛着も湧いていますし」

遠藤 「まあな。古臭くはあるが、今更綺麗ピカピカになってもそれはそれで背中が痒くな

ちまうしな」

渡辺 「えーなによ、別に私だって好きなんだから。ただちよつと改装も良いかなーって

思っただけよ」

山田 「分かってますよ。結局皆さん、このままのはちぼち荘が好きなんですわねえ」

大家 「嬉しいこと言ってくれるじゃない。このアパートが皆さんの居場所になっているの

だったら、本当に何よりだよ」

遠藤 「まあそれによ、改装して家賃が上がるってのも勘弁だしな」

4人、頷く。

遠藤 「お前（早乙女）はアイドルで稼いでるだろ」

山田 「しかしこのタイミングで改装のお話ですか…」

遠藤 「どうした？」

山田「いえね、実はこの辺りでよくない噂を聞いていまして。なんでもあるアパートでは
住人全員へ立ち退き勧告があったとか」

渡辺「え、何？もしかしてそういう話なの？」

早乙女「ねえ大家さん。ここ、なくなったりしないよね？」

大家「大丈夫大丈夫。そんななくなるとかそういう話じゃないから。そもそもそんな話だ
ったとしても僕がそんなことさせないよ。皆さんの居場所をなくすなんてことは
絶対させない」

渡辺「ひゅー！頼もしいー！大家さん！」

早乙女「そうだよね？大丈夫だよね？」

山田「まあ私のも単なる噂ですから」

遠藤「そうだよ、心配し過ぎなんだよ。お前はいつもみたいにアルコールにまみれてろ」

坂本も頷く。

早乙女「ちよつとボクサー君まで。酷いー。じゃあまみれてるー」

早乙女、お酒を取り出し飲み始める。

遠藤「本当に飲み始めるなよ…」

斉藤「すみませーん」

スーツ姿の斉藤、下手から入ってくる。

斉藤「すみません、忘れ物をしてしまいました」

遠藤「誰だこいつ？」

渡辺「もしかして、この人が大家さんの言ってた…？」

5人、大家を見る。

大家「そうそう！この人が、いつも皆さんにお話しているお客さん、斉藤さんだよ！」

斉藤「あー！この住人さん！やっとお会いできましたよー！」

山田「あなたがそのお客様でしたか」

斉藤「はい。いやいやいつもお会いできなかったもので、本当にこのアパートに住んでいる
人なんているのかなーとか思っていましたよ」

遠藤「確かにボロツちいからなあ。心配にもなるわな」

大家「斉藤さんそんなこと思ってたの？」

斉藤「ちよーつとだけですよ！ちよーつとだけ！いやしかし皆さん聞いていた通り、カッ
コよくお綺麗で華のある方々ばかりですねー！」

渡辺「ちよつと大家さん、私達のことそんな風に話していたんですか？（嬉しそうに）」

大家「全然言っていないけど」

渡辺「全然言っていないかい」

斉藤「あれ？そうでしたっけ？皆さん素晴らしい方々に見えましたので」

大家「ちよつとおかしい人なのかもね（斉藤を指差しながら）」

早乙女「ねー」

渡辺「え、早織賛同しちゃうの？今の私達にも斉藤さんにも失礼な言葉なのに」

斉藤「しかしだからこそもつたいない。そのような華のある皆様方がこのような所でお暮
らしになられているというのは」

間

斉藤「おっと失礼」

山田「今のは少し失言ではありませんか？」

大家「斉藤さん。こんなところで暮らしているから、こんな皆さんでも華があるように見
えるのだと思うよ」

早乙女「そうだそうだー」

渡辺「いやだからそれに賛同しちゃうの？」

斉藤「申し訳ございません。別にこのアパートを貶している訳ではないのです。ただちよ
ーつと古くなってしまっているなあ」と

遠藤「だから改装の話って訳か？」

斉藤「はい？」

遠藤「あんた改装屋なんだろう？」

斉藤「ああ、お聞きしましたか。そうですね…改装屋、というか不動産屋というか、まあ
そんなところですよ。いわゆる1つのリフォームのご提案でございますよ」

山田「なるほど。最近この辺りで地上げ屋が動いているという噂がありますからね。もし
かしたら、そういうお話なのかと思いましたよ」

斉藤「…へー…そのようなお噂が」

大家「初めに言っておくけど、そういう話だったからお断りだからね」

斉藤「はい、承知しております。初めはごもそつとでございますから」

大家「え？」

斉藤「いえいえ、皆さんこのアパートを大変気に入っているようですので、私もそんな
皆さんに喜んで頂きたいだけなのですよ」

大家「まあ、そういうことならね」

「アパートメント…コメディ or ミステリー？」

斉藤 「はい」

早乙女 「あの…本当に改装を勧めるってだけなんだよね？」

斉藤 「ええ、ええ。そうですそうです。改装のご提案だけでございます…まったく新しい建物へのね…」

斉藤、誰にも見られないように邪悪な笑みを浮かべる。

暗転。

【五場】

明転。お昼過ぎ。舞台には大家の弟が1人、椅子に座っている。掛け時計は床に落ちていている。下手から立川が入ってくる。

大家弟「こんにちは」

立川「こんにちは…」

大家弟「立川さんかな？」

立川「はい…。あの、ご連絡された方でしょうか？」

大家弟「うん。ちゃんと来てくれたね。ありがとう」

立川「いえ…」

大家弟「ここにあった名刺、勝手に使わせてもらってね」

立川「ああ、なるほど。あの、もしかして…この住人の方でしょうか？」

大家弟「まさか。こんな廃墟みたいところに住む人なんていないよ」

立川「そうですか…」

大家弟「あなた、最近このアパートのこと、色々調べ回っているみたいだね」

立川「え？」

大家弟「僕の耳にも入ってきてね。それでこの前ここに出向いてみたら、ここでこそそし
てるあなた達を目撃したんだよ」

立川「あ、あの時…！えっと…すみませんでした！」

大家弟「こんな廃墟みたいところ探検したって、幽霊くらいしか出てきやしないよ」

立川「ははは…。それであの…あなたは？」

大家弟「ああ、ごめんごめん。僕はね、この大家だった人の兄弟だよ。歳は離れているけどね」

立川「ああ、お兄さんでしたか」

大家弟「…」

立川「いやそれよりも、大家だった人って…一体どういう、」

大家弟「あなた、このアパートのことは何か分かったかい？」

立川「え？」

大家弟「あまり詳しくは分からなかったんじゃないかな？」

立川「そうですね…資料とかもあまり残っていませんでしたので」

大家弟「そうだろうねえ。このことはあまり公にされていないからね」

立川「…お兄さんは何か知っているのですか？」

大家弟「まああなたよりは詳しいと思うよ」

立川「それでしたら、このアパートのことを教えてください。お願いします」
大家弟「うん。今日はそれをあなたとお話したいと思ってさ」

立川 「ありがとうございます」

大家弟 「そろそろこのアパートも、あいつのことも…解放してあげたいからね」

立川 「あいつ？」

大家弟 「ああ、この大家ね」

立川 「はあ…？そういえば今日大家さんは？」

大家弟 「うん、それも追々話すよ」

立川 「え？」

大家弟 「それじゃあぼちぼちお話していいのかな」

舞台後ろに大家・山田・遠藤・早乙女・渡辺・坂本の6人が出てくる。6人は大家弟の話に合わせて動いたり、リアクションを取ったりする。

大家弟 「あなたがどこまでぼちぼち荘のことを知っているかは分からないけど…このアパートは元々僕達のお爺さんが管理していたね。昔はここもそれなりに栄えていたんだ。まあ年々住む人は減ってきたんだけど、あいつが大家になってからは人も増えてね」

立川 「なんだか分かります。大家さん、憎めないというか不思議な魅力をお持ちですね。それで人も集まったんですね」

大家弟 「いや家賃をすごく安くしたからだと思うよ」

立川 「そうですか…」

大家弟 「一番多い時は5人入居者が居てね」

立川 「5人…。お兄さんはその住人の方々がどういう人なのかご存知なんですか？」

大家弟 「うん、僕も時々ここに遊びに来ていたからね。ここの人達のことにはよく知っているよ。まあこんなところに住む人達だから、基本はビンボーとか酒癖が悪いとかガラが悪いとかまあなんか人間性に難有りの人ばかりだったよ。表情が面白い人もいたなあ」

立川 「眨しますね…」

大家弟 「よくからかわれていたからね。でもね、みんな未来に希望を持った人達だった。あいつもそんな住人達のはちぼち荘が大好きだった」

立川 「やっぱり皆さん、仲良いんですね」

大家弟 「だけどね。そんなある日、はちぼち荘に不幸がやってきた」

下手から書類を持った斉藤がやってきて、6人の中に入る。

立川 「不幸？」

大家弟 「うん。アパート改装に見せかけたタチの悪い地上げ、つまりは事実上のはちぼち荘

取り壊しの話だよ」

立川「え？」

大家弟「今あなた達がしているお仕事と、似たようなものかな？」

立川「そう、ですね…」

大家弟「嘘嘘。多分あなた達は法に則った真つ当なものだろう？ だけど奴ら、確か中心人物の名前は斉藤…だったかな？ あいつらはそうじゃなかった」

立川「斉藤…って上の人から少し聞いたことがあります。酷い悪質な地上げ屋だって…！

あれ？ でもその人がいたのって大分昔のことですよ？」

大家弟「うん。だって今してる話、20年前のことだもん」

立川「20年前？」

大家弟「うん。でもそっかあ…もう20年になるのかあ」

立川「いや1人でしみじみしないでください」

大家弟「ごめんごめん。話を戻そう。その斉藤という男、とにかくチが悪かった。そして…住人達への一方的な退去勧告が始まったんだ」

照明効果後方。

大家「初めからそういうことだったんだね、斉藤さん」

斉藤「うーん…上手く伝わっておりませんでしたか。認識の相違みですね。いやーすみませんでした」

遠藤「ふざけんな！ 何が認識の相違だ！ その書類に勝手にサインさせようとしやがって！ 騙す気満々じゃねえか！」

山田「遠藤さん、声を荒げられてはいけませんよ」

斉藤「しかし、あなた達にとつても悪いお話ではないと思いますけどね。ここら一体を大型マンションにしている間、別のところで暮らして頂ければ、その後はそのマンションへの入居をご優遇して差し上げると申しておりますのに」

渡辺「まあ…それはそれで…有りなのかも…？」

遠藤、渡辺を睨む。

早乙女「私はここ、離れる気ないからね」

坂本、早乙女の肩に手を置き、強く頷く。

山田「そうですね。そもそも大家さんを騙そうとしていたくらいです。そのご優遇という話も怪しいものです」

渡辺「え、そうなの？」

大家「そういうことだよ斉藤さん。我々は誰一人としてここから出たいと考えている者はいないよ。帰ってくれ」

斉藤「…分かりました。では今日のところは一旦帰ります」

大家「何度来ても同じことだよ」

斉藤「そうですか…では次回来た時、皆様方のお心が変わっていることを願っております」

斉藤、下手からはける。

照明効果前方。

大家弟「この住人達は誰一人として、はいそうですかと素直に従う者はいなかった」

立川「1人心動かされてる人いませんでした？まあでも、皆さんはちぼち荘が好きだったんですものね。そりゃあ反発もしますよね」

大家弟「しかし地上げ屋つてのも、はいそうですかと素直に従う奴は1人もいないんだよ。

あなたもそっち方面のお仕事をしているなら多少は…分かるだろう？」

立川「まさか…嫌がらせ、ですか？」

大家弟「そう」

斉藤、下手から雑誌を持ってきて遠藤に渡し、再び下手からはける。坂本もはける。

大家弟「それからすぐに奴らの陰湿な嫌がらせが始まった。住人達を追い出すためのね」

照明効果後方。

遠藤「くっそ！ふざけやがって！」

遠藤、手に持った雑誌を叩きつける。

早乙女「いやー見事にこのアパートでボクサー君と手を繋いでる写真が撮られてるねえ…」

渡辺「それだけじゃない…何よこれ！SAOSAOは住んでるアパートの男3人をつっかえひっかえしてる遊び人だって…酷い…！」

山田「誰かここに侵入していたということですからね…これは立派な犯罪です」

遠藤「くそ！俺も昔やった乱闘とか万引きとか窓ガラスを割ったことを書かれてる…。みんな、すまん！俺が昔こんな不良で驚いたと思うけど」

渡辺「それはあんまり驚かないけど」

山田と早乙女も『うんうん』と頷く。

遠藤「おい」

山田「しかしあんな記事の書かれ方をされてしまうと、受験しようとしている大学へのイメージは悪くなってしまうかもしれないですね…」

遠藤「俺は真つ当に勉強がしてえだけなのに…！」

山田「私もとんでもないデマを書かれました。不正なお金を渡しているとの」

渡辺「酷い…なんでそんな記事が？」

山田「そうでもなければ、(雑誌に描かれている自分の絵を指差して) こんな絵柄の漫画が少女雑誌に載るのはおかしい、と。まったく酷い言いがかりです」

早乙女「うん…」

渡辺「それは、うん…」

遠藤「書かれても仕方ない…」

山田「ちよっと！フォローしてくださいよ！」

遠藤「いや普通の読者だったら、確かにお前の絵がりぼんに載ってるのは疑問に思うところではあるからな」

山田「私はそんな不正行為はしていませんよ！」

遠藤「それは勿論分かってるって。けどどあいつら、そういう所につけ込むのが上手いからな…！畜生…！」

全員、悔しそうに顔を下に向ける。

遠藤「でもあれだな…渡辺だけ何もいないな？」

渡辺「そうだね！どうせ私はまだまだ売れない役者だからね！」

山田「良いことじゃないですか」

渡辺「うんまあ…そうなんですけど。でもみんな大丈夫なの？これから」

早乙女「私は…しばらくはまた休業かな…大人しくなるまではね」

大家「皆さん…本当に申し訳ない」

間

早乙女「何言ってるの！別に大家さんのせいじゃないでしょ！」

大家「でも、本当なら僕が何とかしないとイケないのに…」

渡辺「落ち込まないでください！私達は別に大丈夫ですから！」

山田・遠藤・早乙女、渡辺を見る。

渡辺「何よ？」

山田「しかしその通りですよ、大家さん」

遠藤「ああ。いつもの飄々とした大家でいてくれないと、調子狂っちゃまうぜ」

照明効果前方。

大家弟「初めはみんなも耐えていたよ。互いに励まし合ってたね」

立川「皆さん、強いですね」

大家弟「うん。でもね、ああいう奴らは容赦がないから。嫌がらせは日に日に増していった。そして」

照明効果後方。

坂本、下手から入り、そのまま倒れる。大怪我を負っている。

早乙女「ボクサー君！」

早乙女、坂本に駆け寄る。

渡辺「どうしたの…その怪我…？」

遠藤「おいおいおい…！ふざけんなよ！直接手あげるのは違うだろうが！」

山田「大家さん、救急車を呼びましょう」

しかし大家、呆然として反応しない。

山田「大家さん！」

大家「あ、ああ。そうだね、救急車を呼ぼう」

照明効果前方。

大家弟「ボクサーの彼は、その日町で起きた喧嘩の仲裁に入って、それに巻き込まれたんだ。

でも…その喧嘩こそが奴らの仕組んだものだったのかもしれないけどね」

立川「斉藤の悪評を聞く限りでは、それくらいはやるでしょうね…」

大家弟「そして彼は運悪くその怪我で…ボクシングを続けることができなくなってしまっ

た」

立川「そんな…」

大家弟「そして彼はそのまま…はちぼち荘を後にした」

坂本、下手からはける。

大家弟「それがきつかけとなった。勿論警察にも相談へ行った。しかしまともに取り合ってくれない。おそらくもう奴らの根回しがあったのだろう。そして、次は自分達もつと酷い目に遭うかもしれない…。口には出さないが皆そういう気持ちで日に日に強くなつていったんだろう。そうなつてしまえばもはや…そこに留まろうとする者はいなかった。住人達はボクサーの彼女を初めに、1人、また1人とはちぼち荘を出ていった」

早乙女↓渡辺↓遠藤という順番に下手からはけていく。

照明効果後方。

山田、3の部屋の鍵を掛ける。

山田「あ、鍵…癖で掛けちゃいましたよ。…今までお世話になりました、大家さん」

大家「いや…こちらこそ」

山田「結局古巣の私が一番最後でしたか」

大家「こんな…最後になってしまい、本当にすまない」

山田「大家さん、もう謝るのは勘弁ですよ」

大家「しかし…」

山田「出ていった彼らだって、大家さんを恨んでいる人は誰もいませんよ」

大家「本当にそうかな…？彼らはみんな、あと少しで花咲くところだったんだ…それなのに…」

山田「大家さん、大丈夫ですよ。彼らだったらそのまま潰れたりしません。ここを出た後

でもきちんと華を咲かせられます。それは勿論、私もです」

大家「そうだったら…良いのだけれど…しかし…」

大家、顔を下に向ける。

山田「あのですね大家さん。私、いやきつとここを去った皆さんも同じ気持ちでしょう。

1つ、伝えておきたいことがあります」

大家、顔を上げる。

山田「大家さん、私達は、」

斉藤「こんにちは〜」

斉藤、下手から入ってくる。

山田「…この話は、また今度にしましょう。…それでは大家さん、ご達者で」

山田、下手からはける。

斉藤「おやおやすみません。最後の住人さんのご挨拶を邪魔してしまいましたか」

大家「…何をしに来た？」

斉藤「勿論今後のお話ですよ。ほらもう邪魔者は1人もいないでしょう？内心大家さんも

ほっとしているんじゃないやありませんか？皆、自主的に出ていって来てくれた。大家さんも

中々言い出しづらかったのでしょうか？出ていって来てくれという、」

大家「黙れ…」

斉藤「おっと。それではゆっくり今後についてお話致しましょう」

大家「黙れ…！」

斉藤「大丈夫ですよ。すぐにその何倍もの人々がこの土地で暮らすことになりますから。

勿論望むのであれば大家さんにもそれなりの待遇を、」

大家「黙れと言っているんだ！」

斉藤「おっとっと」

大家「もう帰れ…帰ってくれ…！」

斉藤「…分かりました。それでは大家さんが落ち着いた頃にでも、また」

斉藤、下手からはける。

間

大家「静かだね…。この時間が、こんな静かな訳がないんだよ…！そうだろう？皆さん
…！本当はいるんだろう？出てきなさいよ…！いつもみたいに揃って…！出てきなさいよ…！」

照明効果前方。

大家弟「これが20年前にあった出来事の全貌だよ。まあ僕も直接その場にいた訳ではないけど、大体は合ってると思う」

立川「そしてこのはちぼち荘は…取り壊されてしまったんですね」

立川、辺りを見渡す。

立川「…いや、今も残ってるじゃないですかこのアパート！全然取り壊されていないじゃないですか！」

大家弟「うん、そうだよ」

立川「いや今のお話ですと完全に取り壊される流れだったじゃないですか…」

大家弟「その後、取り壊しは中止になったんだよ」

立川「どうして？住人も全員いなくなったのに…まさか、皆さん戻ってきたとか？」

大家弟、首を横に振る。

立川「それじゃあ一体…」

大家弟「その後、はちぼち荘には沢山の人が建物の調査にやって来たんだ。しかし、次々とその彼らが原因不明の事故や病にあってしまっただけ」

立川「え？」

大家弟「そして斉藤もその後一度アパートにやって来たみたいだけど、そこで意識をなくしたらしくてね。それからしばらく病院だったという話だよ。今はどうなっているかわからないけど」

立川「確か…もう亡くなっていると聞いています」

大家弟「そう、ざまあみろだね。そしてそのまま崩壊的に計画は中止。はちぼち荘取り壊しは白紙に戻ってしまった。そんなオカルトチックな話だから役所も正式な記録として残せない。詳しいことは出回っていないのさ」

立川「そういうことだったんですね…」

大家弟「そして20年も経った今、ほとぼりも冷めたと考え、この辺について何も知らない立川さんを調査に向かわせたんじゃないのかな？」

立川「なるほど…。そしてまんまとこのアパートに出向いた私は、そこで大家さんに出会った…うん？大家さん？20年もずっと？」

大家弟「そして最後に、こんな話が残ってる」

立川「え？」

大家弟「このアパートの調査から戻って来た人々は声を揃えて必ず言ったらしいんだよ、『出た』と」

「アパートメント…コメディ or ミステリー？」

立川 「出た？何が？」

大家弟 「死んだはずの大家、僕の兄貴が」

立川 「は？」

大家弟 「残念だけど僕はいつの兄じゃない、弟だ」

立川 「いや…そっちじゃなくて…」

大家弟 「亡くなったんだよ、兄貴は。住人が全員いなくなった、一週間後に」

暗転。

【六場】

明転。夕日。大家と立川が椅子に座っている。掛け時計は床に落ちている。

大家「しかし随分と久しぶりじゃないか、うん？」

立川「お久しぶりです。また懲りずに参りました」

大家「ははは。いやあ…この間はすまなかったね、大声を上げて」

立川「いえいえ」

大家「今日はずっと冷静に話し合おうか、な？」

立川「いえ、それはできません」

大家「うん？」

立川「おそらく、大家さんが冷静になれないと思いますから」

大家「…どうということだい？」

立川、鞆から数枚の資料を取り出す。

立川「あれから、あなたも良く知るお方に手伝って頂き、ここに住まわれていた方々のことを調べ上げました」

大家「な…」

立川「今からそれを読み上げていきます」

大家「何を言っている…!」

立川「坂本太一、元ボクサー。1996年、10月25日、はちぼち荘を退去」

大家「おい…」

立川「早乙女沙織、元アイドル。1996年、10月30日、はちぼち荘を退去」

大家「やめろ…」

立川「渡辺有紀、女優。1996年、11月7日、はちぼち荘を退去」

大家「やめろ…!」

立川「遠藤憲司。1996年、11月15日、はちぼち荘を退去」

大家「やめろ!」

立川「山田将太、漫画家。1996年、」

大家「やめろと言ってるだろう!」

立川「この住人は山田さんを最後に誰も入居しておりません。それはもう20年も昔の話です」

大家「出鱈目なことばかりぬかして!彼らは今もここで暮らしている!」

立川「そして大家さん。あなたは20年前に…亡くなっています」

大家「…?」

立川 「交通事故で亡くなっているんです」

大家 「は、ははは…今度は何を言うのかと思っただら…僕が死んでいるって？それじゃあ何か？僕は幽霊とでも言いたいのか？」

立川 「はい」

大家 「馬鹿げてる！いい加減にしなさい！そもそもキミとはこうやって会話をしているだろう？都合良くもキミには靈感があるとでも言うのか？」

立川 「ここからは私の憶測ですが、私を地上げ屋だと勘違いした大家さんは、私にだけ見えるように姿を現したのではないのでしょうか？今度こそこのアパートを守りたいという、想いによって」

大家 「よくもそんな妄想話ができるね？ええ？僕は交通事故で死んでなどいない！住人達も全員いる！これが真実だ！」

立川 「大家さん。私は交通（強調する）事故とは一言も言っていないよ？」

大家 「え？言ったよ？」

立川 「あ、言いました？」

大家 「うん」

立川 「うわ、恥ずかしい。せつかく名探偵みたいになってたのに…」

間

立川 「その事故は地上げ屋とは関係の無い、不幸な事故だったと聞いております」

大家 「スツと、戻したね」

立川 「しかし世間では地上げ屋の仕業ではないかという噂が流れ、その結果地上げ屋も表立ったことはできなくなり、そのことも建て壊し中止に影響を与えたのだと…」

大家 「何の話かまったく分からんね。だって僕は生きているから」

立川 「大家さん、いつも昼間は何を？」

大家 「何って…キミに言うことではない」

立川 「大家さんご自身も分からないのではないですか？何をしているのか」

大家 「そんなことは…！」

立川 「暗くなり始めてからでないと、姿を現せないのではないですか？」

大家 「…どういう意味だい？」

立川 「そしてあそこに落ちている掛け時計。私が一番初めに訪れた時から一度も元の位置に戻されていない。お渡しした名刺、資料だってそうです。ずっと同じ場所にあります。お部屋のノックだって私にさせましたよね？つまり、あなたは物に触ることができないのではないですか？」

大家 「だからどういう意味だい？」

立川 「それは大家さんが、幽霊だからという意味です」

大家「は、はははは！本当に、面白くこじつけるねキミは！はははは！面白い、実に面白いよキミ！」

立川「そうですか？」

大家と立川、しばらく2人で笑い続ける。

間

大家「ふざけるなよ」

大家の周りから不気味な雰囲気。照明効果。

大家「ふざけるな…！ふざけるなよ…！」

立川「そうやって…私のも呪おうというのですか？」

大家「お前も！お前も僕達から奪おうというのか？居場所を！みんなの居場所を！大切な居場所を！もう二度とあんなことを起こしてたまるものか！僕が守るんだ！みんなを！この住人を！」

立川「あなたはただ…不甲斐なかつた自分を責めているだけではないのですか？大切な住人を誰1人守ることのできなかつた不甲斐ない自分を…」

大家「お前達に何が分かる？お前らのせい…僕のせい…みんなの夢を、未来を…駄目にしてしまった…」

立川「いえ、違います」

大家「何が違うんだ？何が？」

立川「そう思っているのは、ここですつと過去に縛られている大家さんだけです」

大家「何だと…？」

立川「確かに思い出は大切です。しかしそれに、過去に囚われているだけでは、駄目なんです。例え辛く困難なことがやってきても、それを乗り越えれば、ずつとものと良いことが、その先に待っているかもしれないんですから」

大家「何が言いたい…？」

立川「アパートを出た後も住人の皆さんの未来は勿論続きます。同じ過去を見続けるのではなく、その先を、皆さんが一度バラバラになってしまったその先の未来を見てください」

大家「僕は…」

立川「大家さんあなたは、自分の目で、皆さんのその後をしっかりと見てあげなければいけないのです！」

沈黙。

大家 「しかし…彼らはもう」

渡辺 「こんにちはー…」

退去してから20年後の渡辺、下手から入ってくる。

渡辺 「あれ？私が一番乗りかな？」

立川 「お待ちしておりました」

大家 「渡辺…さん？」

山田 「いやー昔と変わっていませんねえ」

退去してから20年後の山田と遠藤、下手から入ってくる。

遠藤 「いやいやさらにボロっちくなってんだらう。暗いし」

立川 「お待ちしておりました」

渡辺 「え？山田さんと、遠藤…？」

遠藤 「おー渡辺か。相変わらず面白い表情してんな」

渡辺 「久しぶりの挨拶がそれかい」

山田 「お久しぶりです、渡辺さん」

大家 「山田さん…？遠藤さん…？」

早乙女 「えー私達が最後ー？」

退去してから20年後の早乙女と坂本、下手から入ってくる。

遠藤 「おっせえぞお前ら」

早乙女 「うわー！みんな老けてるねー！」

渡辺 「おいおい」

早乙女 「でも辺ちゃんテレビより綺麗ー！」

大家 「早乙女さん…？坂本さん…？」

立川 「皆さん、本日はお忙しいところお集まり頂きありがとうございます」

5人、立川を見る。

立川 「私が皆さんにご連絡させて頂きました立川です」

遠藤 「おう」

立川「その時ご説明もしましたが、本日皆さんにお集まり頂いたのは、」

渡辺「ああはいはい。分かってるよ」

遠藤「まあ今でも信じらんねーけどな」

山田「私はなんとなく分かる気がします。確かに出てきそうですよ、あの人は」

坂本、頷く。

早乙女「ということでき、いるんでしょう？大家さん」

立川「はい」

渡辺「もうこの場に？」

立川「はい」

5人、辺りをキョロキョロする。しかし大家を視認できる者はいない。

早乙女「やっぱり私達には視えないや…」

立川「残念です。しかし、声は届くと思います」

早乙女「うん」

遠藤「おい、戻って来てやったぞ、大家よ」

大家「違う…！彼らは違う…！誰だ、誰だこいつらは…！」

山田「申し訳ございません大家さん。今まで帰って来ることができませんで…。お葬式も、行けずに…」

大家「縁起でもないことを言う…誰の、誰の葬式だ…」

立川「そうですね。今ここにいる皆さんを認めることは、自分が抱いている20年前の皆さんの幻想を否定することと、同じですものね」

大家「僕は…こんな人達は知らないんだ…！」

立川「しかし大家さん、きちんと皆さんと向き合ってください」

早乙女「何々？なんかめんどくさいことになってんの？」

立川「大家さんは今もこの時も、20年前の過去に囚われているんです」

早乙女「ええー？」

遠藤「おいおい、じゃあ大家は20年も1人であの頃のはちぼち荘を続けてるっていうのかよ」

早乙女「なんとかしなきゃ」

山田「分かりました。それでは無理やりにも私達のことを認めてもらうしかありませんね」

渡辺「どうすんです？」

山田「簡単なことです。1人1人、今の自分達のことを大家さんにお話するのです。昔の

私達はもうどこにもいないことを分からせるのです」

渡辺「なるほど」

早乙女「分かった！」

立川「お願いします」

大家「…っ！」

大家、5人から離れる。

山田「大家さん、聞いてください」

立川、話している山田が大家の方向へ向くように無言で山田の体を動かす。山田はそれを気にせず話し続ける。

山田「私はあの後も漫画を描き続けました。そして少女漫画だけでなく、他ジャンルにも挑戦し続けました。今日はその表紙になった漫画のポスターを、持ってきたんですよ」

山田、鞆からポスターを取り出し、遠藤・渡辺・早乙女に渡す。

山田「SFミステリー、極道グルメ、アイドルのバトル漫画、と色々です」

渡辺「ホントに色々描いてますね」

山田「今や各ジャンルごとに、絵の描き分けもしているくらいなんですよ」

遠藤「へー…全然その違いが分からないけどな！」

遠藤達、手に持った原稿を正面に向ける。絵は全てあの独特な劇画タッチ風の絵。

早乙女「相変わらず独特な絵だねー」

山田「うーん自分では描き分けているつもりなのですが。しかし大家さん。私はこのようにお仕事、順調に続けていますよ」

大家「…！」

大家、再び5人から離れる。

遠藤「次は俺の番だ」

立川、話している遠藤が大家の方向へ向くように無言で遠藤の体を動かす。遠藤は

それを気にせず話し続ける。

遠藤「俺は20年前のあの出来事が本当に悔しくてな…。いくら腕っぶしが強くても、いくら威勢がよくっても、全然意味がなかった。だから俺はここを出た後も、さらに死にももの狂いで勉強した。そしてとうとうなつてやったんだ」

渡辺「インテリヤクザに？」

遠藤「ああ、頭と腕っぶしで裏社会をのし上がつてやったぜ、馬鹿野郎。ちげーよ！」

山田「懐かしいですねこの感じも」

遠藤「俺は今、弁護士やつてんだよ」

山田・渡辺・早乙女「えー」

渡辺「弁護される側じゃなくて？」

遠藤「誰が暴力事件起こして弁護士雇つてるだ！」

渡辺「いやそこまで言つてないけど」

遠藤「俺はな、俺達みたいな悔しい思いをするやつを出したくねえんだ。だからきちんとした法律で戦える、弁護士になつてやったんだよ」

早乙女「へー」

山田「見直しましたよ」

大家、遠藤をじつと見つめる。しかしまた5人から離れてしまう。

渡辺「やるじゃない遠藤。でも私も負けてないから」

立川、話している渡辺が大家の方向へ向くように無言で渡辺の体を動かす。渡辺はそれを気にせず話し続ける。

渡辺「大家さん。私はね、昔から変わらずつと役者をやっています。最近の色々なところにも出させてもらつて活躍しているんですよ。ね、みんな？」

遠藤「活躍ってほどじゃないだろうが」

渡辺「えー…まあ確かに主役とかはほとんどないけど…でもですね、」

遠藤「名脇役だつて言われてんだろ？」

渡辺「うん。去年は役者の仕事頑張りまして、」

遠藤「ドラマ3本、舞台2本、映画1本出たんだろ？」

渡辺「うん。そして今度春にやる舞台ですね、」

遠藤「主役やらせてもらうんだろ？このはちぼち莊みたいなアパートが舞台の『アパート

メント…コメディ or ミステリー？』っていう公演に女大役で」

渡辺「なんで全部先に言っちゃうの？」

山田「どうか渡辺さんのことかなり詳しいですね」

早乙女「うんうん。何だかんだ言ってる、ヤンキー君は辺ちゃんのこと好きだもんねえ。ていうかぶっちゃけ、20年前から、辺ちゃんのこと好きだったんじゃないの？よくちよっかい出したたのも、愛情の裏返しだったんでしょ？」

渡辺「え？」

遠藤「はあ：渡辺」

渡辺「え？ちよっと、ええ？」

遠藤「俺は昔から恋愛的にお前のことが好きだ、ということは全くない」

渡辺「なんでい！」

早乙女「あちゃー」

遠藤「なんかごめんな」

渡辺「なんで私、何も言っていないのにフラれたみたいになってんのよ！」

5人、笑う。大家も思わず微笑んでしまうがすぐに顔が戻る。しかし今度は5人から離れようとしない。

遠藤「ま、でも女優としてのお前のファンではあるけどな。これは認めてやるよ」

渡辺「ふん。ありがとう」

大家、早乙女をじっと見ている。

早乙女「大家さん。私はね、今この人の奥さん、専業主婦なの。あの後色々あったからさ、

結局思い切ってアイドルは辞めちゃったんだよね」

遠藤「そうだったな…」

山田「私も悲しかったです。ですから、SAOSAOがモデルの漫画を描いたんですよ（先ほどのアイドルバトル漫画のポスターを広げ、ヒロインを指差す）」

渡辺「あ、その娘早織だったんですね」

早乙女「勿論アイドル辞める時は辛かったよ。だけどね、今の生活だってアイドルの時と同じくらい、うん、それ以上に充実してる。もし過去に戻れたって、私は今の生活を取ると思う。それくらい今の私は、胸を張って幸せだって言えるよ！」

坂本も頷く。大家、今度は坂本をじっと見る。

坂本「最後は私ですね」

山田・遠藤・渡辺「おおー！」

早乙女「喋った！」

渡辺 「え、早織も声聞くの久しぶりなの？」

早乙女 「うん、1年ぶりくらい。結婚してからますます無口になっちゃってさ」

坂本 「私は今、ボクシングのトレーナーをやっております。ボクサーの道が絶たれた時は正直心も折れかけていました。しかし、彼女の支えもあり、別の道、トレーナーという道でボクシングに関わることを決めたのです。そして僭越ですが、先日私が見ているボクサーがチャンピオンになりました」

山田・遠藤・渡辺 「おおう！」

渡辺 「ちよつとすごくないそれ？」

早乙女 「すごいでしょー」

坂本 「ボクサーの道を絶たれても、早織と同様今の私は、胸を張って幸せと言えます。大家さん」

早乙女 「こんなに喋ったらまた1年は無口のままかな」

渡辺 「それでどうやってボクサーに指導してるの…？」

早乙女 「心と心でぶつかると言葉なんていらなんだったって」

坂本、笑顔で頷く。

遠藤 「しかしどうだい大家よ。俺達もだいぶマシになったと思わねえか？」

渡辺 「もうあの頃の頼りなかった私達じゃないんですよ」

山田 「大家さん、私が出るとき言えなかったことを、言わせてください」

大家、山田に顔を向ける。

山田 「大家さん。私達は、前を向きます。いつかまた必ずどこかで再会した時、今の自分を立派だと言えるよう、後ろなんて見ずに一生懸命前へもがき続きます。ですから大家さんも、私達に囚われずにどうか前へ、先へ、進んでください」

4人もゆっくり頷く。

山田 「あの時、それを伝えなかったんです。そして今、その先を歩んだ今の私達を、どうか…認めて頂けませんか？」

間

大家 「はっはっは…まさかキミ達に、説教される日が来るなんてなあ」

遠藤 「頼むよ…大家」

大家「うん。分かった、降参だ。認めたよ。認めた。キミ達は本当に…立派になったよ」

渡辺「お願い、大家さん！」

大家「うん、だから認めたよ」

立川「あの、皆さん、」

早乙女「私達を認めて！」

大家「うん、だからさ、」

坂本「大家さん…！」

大家「認めたって言ってるでしようが！」

立川「あの！皆さん！」

5人「え？」

立川「大家さんが無事皆さんを認めてくれましたので、その辺で」

早乙女「ホント？」

渡辺「よかったー」

大家「まったく…しんみりした感じにもなれやしないうこれじゃあ」

立川「すみません」

大家「でもまあ…やっぱこういう雰囲気が好きなんだよなあ」

立川「…はい」

大家「あのさ。皆さんに、来るの遅いよ馬鹿！って伝えてもらえないかい？」

立川「分かりました。伝えますね」

渡辺「え？何々？」

早乙女「大家さんなんか言ってくれたの？」

立川「はい。皆さん、集まってくれてありがとう、って言っていますよ」

5人、笑顔になる。

大家「あーらら…何言ってるんだい」

立川「でも本心はこちらだと思ひまして」

大家「…色々、ありがとうね。僕のために」

立川「いえいえ。全部仕事のためですよ」

大家「20年前にやってきたのがキミだったら、また違っていたんだろうなあ」

立川「どうなんでしょうか」

大家「うん、それじゃあ…そろそろかな」

立川「はい…」

大家「皆さん…また会えたら、ね」

暗転。

間

明転。大家、いなくなっている。

立川 「はい。また…どこかで」

山田 「成仏、してしまったのですか？」

立川 「はい…」

早乙女 「そっか…」

遠藤 「ま、あの大家のことだ。俺達が死ぬまで見守っててくれるんじゃないのか？」

渡辺 「ははは。ありそう」

早乙女 「この後はちぼち荘、今度こそ取り壊しちゃんでしょう？」

立川 「ええ、申し訳ありませんが…」

早乙女 「ううん。一応確認しただけだから。最後にみんなと会えて嬉しかったし！逆にありがたうだよ！」

坂本も頭を下げる。

遠藤 「まあ最初にあんたと大家の弟さんから連絡が来た時はびっくりしたけどな」

山田 「そうですね」

立川 「すみません」

遠藤 「ああいやそうじゃなくてよ、ありがとうございますってこと」

山田 「はい。はちぼち荘のことはずっと気に掛かっていたことでしたので…このような機会を設けて頂き、ありがとうございます」

渡辺 「うん、ありがとう」

立川 「いえ、こちらこそありがとうございます」

早乙女 「さてさて皆さん！」

立川 「はい？」

早乙女 「せっかくみんな集まったんだからさあ…分かるよね？」

山田 「まあそうなるとは思いましたが」

立川 「え？え？」

早乙女 「もう少ししたら今度こそここもなくなってしまふことだし！今日はここで、一晩宴会といきましょうよ！」

遠藤 「俺達ももう若くねえんだけどなあ」

渡辺 「じゃあ帰るの？」

遠藤 「帰るとは言ってねえだろ」

早乙女 「ほらほら、立川さんも一緒に！」

立川 「私ですか？」

早乙女 「勿論！それじゃあ買い出しに行きましょー！」

渡辺 「ふっふっふー。皆さん、実はわたくしそうなると思ひまして、すでに色々買っておきました！」

山田・遠藤・早乙女 「おー！」

渡辺 「表の車に積んであるから、ほら男どもはさっさと運んできなさいな！」

遠藤 「へえへえ。つか電気はどうすんだ？今はもうつかねえだろ？真っ暗になるぞ」

早乙女 「懐中電灯があれば大丈夫大丈夫」

山田 「みんなで照らし合うんですか？」

立川 「なんだか肝試しみたいになりますね…」

渡辺 「流石に懐中電灯は買ってないわー」

大家弟も下手から現れる。全員、ワイワイ飲み会の準備をする。

徐々に暗転していく。

【七場】

はちぼち荘が取り壊された後に建ったマンションの管理入室。

明転。立川と内山が椅子に座っている。掛け時計の針は19時を差している。

立川「これで話はお終いかな。けっこう長くなっちゃったけど」

内山「へー結局あの後そんな話になっていたんですね。僕もけっこう気にはなっていたんですけど」

立川「まあお前急に別の案件に回されることになったもんな。一緒にここの担当ができなかったのは俺も残念だったよ」

内山「ちよっと前まではここがあのおンボロアパートだったんですもんねえ」

立川「ああ。今はすっかり高層マンションだけだな。そこでここの管理人の仕事はどうよ？順調か？」

内山「まあぼちぼちやってます」

立川「よかったよかった。それでまあお前もこのマンションの管理を始めて一か月だからさ。歴史のお勉強も良いと思って、あの子の話をしにきたって訳よ」

内山「先輩：暇なんですか？」

立川「なんでだよ！そこは感謝しろよ！ちゃんと忙しいわ」

内山「よかったよかった」

立川「…お前も相変わらずだな。…でもさ、今の話、実際どう思った？」

内山「え？」

立川「流石に全部は信じてないでしょ？」

内山「いやいや信じましたよ」

立川「ホントに？自分で言うのもなんだけど、霊的な話も入ってるからさ、けっこう嘘くさかったでしょ？」

内山「まあ確かに胡散臭さはありませんでしたが、僕は本当に信じましたよ全部」

立川「はははは、前言撤回。なんかちよっと素直になったのかお前？」

内山「だって居ますもん」

立川「うん？」

内山「だってあの大家さん、今も出ますもん」

立川「は？」

内山「ですから出るんですよあの大家さん。このマンションに」

立川「はー！」

内山「先輩来るって聞いたんで、今日はその相談をしようと思っていたんですよ」

立川「いやいや待ってよ。だってあの大家さん、成仏したんだよ？」

内山「いやそれなんですけどね。その大家さんが消えたって時、ちゃんと成仏しましたよ
って除霊師さんとか霊関係に詳しい方が言ったんですか？」

立川「いや、その場にはそういう人はいなかったけど…」

内山「だからやっぱりその時成仏してなかったんですよ」

立川「えー…」

内山「このマンションに住んでいる人達からですね、色々話をもらっているんですよ。夜
になると変な着物姿のおっさんが出るって」

立川「マジかよー…その話こそ信じられない…」

内山「本当です。実は私も何度か見ていますし」

立川「うそーん…。とういかなんでみんな大家さんのこと視えてるの？」

内山「さあ？まあさっきの話を聞く限りですと、抱えていた闇も晴れてスッキリしたから
じゃないですかね？」

立川「どういう理由だよそれ…。じゃああのあれか？なんか住人の皆さんに迷惑とかかけ
てるの？大家さん」

内山「うーんそれが」

立川「何？」

内山「特にそういう実害とかは今のところ出ていないですよね」

立川「え？そうなの？」

内山「はい。あの大家さんが住人の方に気さくに話しかけたりするだけなんです」

立川「あ、そんな感じなんだ…」

内山「むしろ私ではなく、むこうが管理人だと勘違いしている住人がいるくらいなんです
よ」

立川「うん、じゃあもうさ…ほっといても良いんじゃない？」

内山「いやいやそういう訳にもいきません。幽霊だと気付いている人からの苦情もあるの
で。ですから先輩…なんとかしてください」

立川「いやいやいや！俺だって無理だよ！」

内山「だってその大家さんとけっこう仲良くやっていたじゃないですか」

立川「いやいや！そういう問題じゃないよ！」

大家、下手から現れる。

内山「あ、出ました。後ろにいます」

立川「え？」

立川、後ろを振り向く。大家、立川に見えないように避ける。

立川 「いないじゃん。あ！もしかして俺にはもう視えないのかな？」

内山 「違います。ただ避けただけですからあの人」

大家 「久しぶりだねー立川さん」

立川 「うわ！ホントに出た！」

大家 「何だよー。人を幽霊みたいに」

立川・内山 「いや幽霊でしょあんた！」

大家、拍手する。

立川 「拍手やめい」

大家 「いやいや元気そうでよかったよかった」

立川 「大家さんもなんか以前より元気ですね…」

大家 「まあ色々スッキリしたからね」

立川 「だったら成仏してくださいよ…」

大家 「だってさーなんだかんだで結局20年も1人だった訳だからさ、成仏はここの新し

い住人達と、もう少しだけ遊んでからにしようかなって」

内山 「いやいや早く成仏してください」

大家 「大丈夫大丈夫。僕が色々大家のノウハウを教えるからさ」

内山 「けっこうです」

大家 「なんかこの人、当たりがキツイよね」

立川 「あ、それは私も思ってます」

内山 「賛同しないでください」

3人、ワイワイ話をする。

徐々に暗転していく。

(終)